

二〇二六年度

群馬県立女子大学 文学部 美学美術史学科

後期入試問題

小論文

試験時間は十一時～十二時までの六十分です。中途退室は認めません。途中で気分の悪くなった場合は、黙って手を挙げて下さい。

問題用紙はこの表紙を含めて五枚（最後の白紙部分は下書き用）、解答用紙は一枚です。それぞれが配られたら、指示に従って、解答用紙の所定の欄に受験番号と氏名を記入して下さい。試験開始の合図があるまで問題用紙の表紙をめくって問題を見てはいけません。

受験番号と氏名を記入し終えたら、静かに試験の開始を待って下さい。

問題

次の文を読み、問いに答えなさい。

OpenAIが発表したSoraが話題になっている。同社の画像生成モデルDALL・Eを動画にも拡張したもののだが、同種のものですでに複数存在する。実用的な生成AI（人工知能）の登場が2010年代後半だから、10年足らずで選択肢も増え、性能も劇的に進化したことに驚く。

生成モデルの写真的完成度が注目された一つの契機は、23年にドイツのボリス・エルダグセンがソニー・ワールド・フォトグラフィ・アワードで起こした「事件」だった。エルダグセンは公募部門に、1940年代風のポートレート作品「偽の記憶・電気技師」を応募して見事に優勝。だが授賞式で同作が生成画像だと暴露して賞を辞退し、センセーションを起こした。彼はその目的を、生成画像が写真の進化ではなく新しい表現手法であり、「芸術とは何か？」を改めて問うことだったと説明。自らの手法について、言葉の指示による生成プロセスから「プロンプトグラフィ」と称している。

それから2年、生成の精度はさらに向上し、写真との境界はさらに薄くなっている。興味深いのはこの技術が、写真表現に脅威と新たな希望とを同時に与えていることだ。

この矛盾した状況は、1839年にダゲレオタイプ（注1）が公表された時の、画家の心境を想起させる。フランスの画家ポール・ドラロッシュは、その精密な描写を目にし、知人に「今日、絵画は死んだ」と嘆いたと伝えられる。しかし、ドラロッシュはその可能性も理解していた。ダゲレオタイプの詳細を科学アカデミーで発表したパリ天文台長のフランシス・アラゴには「美術に多大な貢献をするものであり、最も熟練した画家でさえも研究に値する」との意見書を送っているのだ。

事実、19世紀後半の画家には、写真を素描の代替手段としたり、光学的な描写特性やフレーミングを取り入れたりした者も多い。その一方で写真には表現できない要素を模索し、絵画は抽象性を高めていった。エルダグセンの発言からすれば彼は後者の側に立っていると見えるが、その作品はまだ写真のシミュレーションという範疇はんちゆうにある。生成画像とは写真を学習して生まれた二次創作物であり、比喩的に言えば確率論的なイメージのモニタージュ（注2）だ。彼の作品は、このことを証明したのだった。

出典：鳥原学「技術から読む写真史」（日本経済新聞 二〇二五年十月二十二日付夕刊）

※なお、一部改めたところがある。

（注1）ダゲレオタイプ：銀板写真。現在の写真技術の根源となるもの。

（注2）モニタージュ：何枚かの写真から一部分ずつを取って一つに合成した写真。

問

本文をふまえ、表現の世界における生成A Iの登場と作者の役割や存在意義について、あなたの考えを八〇〇字以内で述べなさい。

